

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2022
 課題番号：19K00105
 研究課題名(和文) スローターダイクの球体概念を手掛かりとするハイデガーの世界概念と技術論の再検討

 研究課題名(英文) Reexamination of Heidegger's concept of world and theory of technology on the basis of Sloterdijk's concept of sphere

 研究代表者
 高田 珠樹 (TAKADA, Tamaki)

 大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・名誉教授

 研究者番号：80144541
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は、現代ドイツの哲学者スローターダイクの数多くの浩瀚な著作の読解を通じて、彼の思想の全容の解明とともに、スローターダイクとハイデガーの関係性を明らかにすることを試みてきた。研究助成を受けた期間、ちょうど新型コロナウイルスの流行期と重なり、様々な制約があたものの、期間内に比較的短いながらスローターダイクの思想を概観する小文を2本、発表した。また彼の核心的な思想とも言える、『球体圏』については、その標題を冠した著作があまりに膨大であるため(約2500頁)、当面、翻訳紹介は困難なもの、その内容を凝縮した別の著作(約420頁)の翻訳が着実に進行中であり、来年度に解説を付して刊行を予定している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 スローターダイクは、主著『球体圏』を始めとして、多くの国で翻訳が進み、世界的に極めて重要な思想家として認知されているが、日本では、初期の代表作を申請者が比較的早い段階で翻訳したものの、その後、紹介が進まず受容が滞っている。彼の著作は、人類史全体を人間が自己の環境の変容を通じて自己自身の創成する過程として捉える一方、近代全体を海洋を中心としてグローバル化として特徴づける独自の世界史の構図を呈示している。成果自体はこれまでのところ小論文2本にとどまっているが、来年度に予定する単行本の翻訳を含め、以後、精力的にスローターダイクの思想の紹介を通じて、日本の哲学研究に寄与したい。

研究成果の概要(英文)：I, the applicant has attempted to clarify the relationship between Sloterdijk and Heidegger as well as the full scope of the German Philosopher Sloterdijk's thought through reading a number of his voluminous works. During the period of the research grant, which coincided with the outbreak of the COVID 19 I published two relatively short essays outlining Sloterdijk's thought, despite the various restrictions caused by the disease. As for "The Sphere," which can be said to be the core of Sloterdijk's thought, the sheer volume of the work bearing that title (approximately 2,500 pages) makes translation and introduction difficult for the time being, but I am steadily translating another work (approximately 420 pages) that condenses its contents, and plan to publish it with commentary in the next fiscal year.

研究分野：哲学

キーワード：スローターダイク ハイデガー 球体圏 人新世

1. 研究開始当初の背景

現代ドイツの哲学者ペーター・スローターダイク(1947~)については、ハイデガー以後では、ドイツの最も重要な哲学者であるにもかかわらず、著作が極めて難解な文章で書かれることなどもあり、初期の代表作『シニカル理性批判』(原著1983年刊)や『魔の木』(原著1985年刊)を申請者が日本語に翻訳・紹介した以外、それ以後の比較的短い著作が数点、翻訳されてきたのみである。1990年代末から2000年代初頭にかけて刊行された三部作『球体圏』などについては、それがハイデガーを始めとする現象学における世界経験の概念を批判しつつ、新たな歴史哲学を構想するものであるにもかかわらず、日本では、その存在すらほとんど知られてこなかった。申請者自身、年齢的に30歳代から40歳代前半では、スローターダイクの著作の翻訳やそれに関する論文の執筆を通じて、スローターダイクの日本への導入を図ったが、その後、別の複数のプロジェクトに関わることになり、スローターダイクが『球体圏』の刊行を開始した頃以後の思想展開については、ほとんどフォローすることができていなかった。

初期の、学生運動退潮期に特徴的な社会批判的な姿勢から、人間存在をそもそも一種の技術的・人工的な存在として理解し、その歴史的な系譜をたどる彼の壮大な歴史把握については、理解がついていけないでいた。人間を技術的な存在と定義したうえで展開される、『球体圏』の空間論や人間生成論は、日本では東北の震災や福島原発事故以後、ハイデガー読解の上で大きな比重を占めるに至った技術論との接合の可能性を秘めていた。申請者がスローターダイクを翻訳・紹介していた1980年代から90年代前半は、まだスローターダイクの名前は世界的には無名に近く、むしろ日本での紹介は欧米よりも進んでいたが、申請者がスローターダイクに関わるができないでいる間に、スローターダイクの紹介は世界的に極めて重要な思想家として認知され、多くの著作が各国語に訳されるようになっていた。しかし、極めて難解な文章で綴られる彼の著作を解読して、その思想を本格的に導入・紹介しようとする研究者は現われていない。

申請者は、こういった状況の中で、スローターダイクの90年代半ば以降の思想をあらためて受容し、その思想の概要を日本に紹介しつつ、ハイデガー研究との接合の可能性を模索する必要性を痛感していた。

2. 研究の目的

ハイデガーについては、主に第二次大戦後、技術の問題に深い関心を持ったことが知られている。『存在と時間』(1927年)だけでなく、その原型とも言われ、その5年前の1922年秋に執筆されたいわゆる「ナトルプ報告」の中で、古代ギリシャにおける世界経験がすでに製作する立場から構想されていることを指摘しており、技術の問題は、かなり早い段階からハイデガーの中心的な関心の一つであったことがうかがえる。しかし、世界や真理性といったハイデガーの中心的な関心として認知されている問題系との連関が見えにくく、いわば孤立した観のある主題であった。

スローターダイクが2000年前後に刊行した『球体圏』三部作は、人間を、総じて自然界の中に人工空間を出現させ、かつこの人工空間によって生み出された技術的な存在として捉える視点を提示しており、ハイデガーの「世界内存在」や、古代ギリシャ以来の西洋の存在把握は製作的な存在論に根差すとする見地を、一種の歴史文明論を介して一貫した視点で捉える可能性を秘めていると思われる。

ハイデガーは、広い意味での歴史を「存在の歴史」として捉え、存在が出現と同時に消失した痕跡として、西洋、ひいては人類の歴史を構想したが、それと人類が様々な形で技術を駆使して具体的な歴史を紡いできたことがどのように重ね合わせられるのかについては、積極的に語ろうとはしなかった。ある意味で、それは解釈者の恣意に委ねられているとの観を免れない。もっとも、スローターダイクの『球体圏』が、単純にその空隙を埋めてくれるものではない。むしろ彼の著作の中では、ハイデガーだけでなく、20世紀の現象学全体が、しばしば人間の原経験や大地との根源的なつながりを強調することで、むしろ技術によって人類としての歴史が築かれてきたことが隠蔽されていると指摘している。その意味で、外的な自然を遮断しつつ、それを人工の内部空間の内に模倣して取り込むことに人間の空間経験の本質を見て取るスローターダイクの『球体圏』のテーゼと対照しながら、ハイデガーの世界概念、とりわけ技術論の再検討を通して、現在に生きる者の社会的、文明的な課題に積極的に対処しうる思想的な基盤を得たいと考える。

3. 研究の方法

助成を受けた今回の研究では、主にハイデガーの後期の著作で展開される技術論が、『存在と時

間』を中心とする時期の「世界内存在」や真理論とがどのように繋がりをかき、スローターダイクの『球体圏』や、その刊行の前後に発表された著作のテーゼと照らし合わせて検討する作業を中心に構想した。

スローターダイクについては、とりわけ『球体圏』三部作（第一部「泡袋」1998年、第二部「地球体」1999年、第三部「泡立ち」2004年）と、それらが刊行される前後の時期に刊行された関連する書物（『人間温室』2001年、『資本の内部空間の中で』2004年）さらに彼自身のハイデガー論の集成である『救いなし』（2001年）を中心に、上記の観点から読み直すことを試みた。並行して、ハイデガーの著作のうち技術について述べているところを、特にスローターダイクの描いてみせるような構図に回収されるか、という観点から検討することを構想していた。

研究自体は、相当長期にわたる作業を想定しており、比較的、限られた時間の中での助成期間では、本来、一定の結論と成果を得ることを求められることから、研究の効率化を図る上で、1年目には、ハイデガーとスローターダイクそれぞれの関連する著作や講義のデータベース化を行ない、特定のキーワードに着目し、その検索を通じて該当箇所を絞り込んだ上でそこでの論点を検討比較することは、問題点の所在を明確にすることを想定していた。

2年目もこの作業を継続するが、読解を進める中で、両者における空間経験と技術を巡る議論の関係性について上記の構図がある程度、確認されるか、あるいは新たな構図が見えてきた段階で、スローターダイク本人や、ドイツ語圏のハイデガー、スローターダイクに関する研究者らを訪ね、この構図について意見を交わしたいと考えていた。

また、3年目には、それまでの研究成果をまとめることに主眼を置き、研究期間終了までにスローターダイクに関する概説的な記述と、自身のハイデガー解釈とを兼ねた著作として出版することを予定していた。

しかし、研究助成を受け始めた初年に、それ以前から抱えていた岩波書店『フロイト全集』の完結に向けた作業に思いのほか労力を奪われたこと、また2年目からは、新型コロナウイルスの蔓延で大学構内への立ち入りも難しくなる一方、ヨーロッパへの短期の滞在のための渡航が実質的に不可能になり、研究方法の大幅な変更が不可になり、また当初、3年間を想定していた助成期間を1年間延ばすことを余儀なくされた。一方で、研究を進めていく中で、当初、比較的短期に纏められると考えていた主題は、スローターダイクの著作を読み込む作業に思いのほか難渋することになった。このため、当面は、スローターダイクとその関連書籍のデータ整備とその読解に力点を移し、当初の構想の実現には長期的な課題とすることにした。研究方法自体は、当初の予定とそうは変わらないが、現実には、作業の力点が、より長期で大掛かりな作業の基礎部分の足固めに重心が移ったことは否めない。

4. 研究成果

助成を受けた過去4年間の作業で、スローターダイクの思想、とりわけ『球体圏』とその周辺の著作群の輪郭については、以前よりも相当明確になり、また申請した研究主題である、ハイデガーの「世界内存在」と、スローターダイクの「球体圏」としての世界については、それなりに見通しを得たと考えている。

もっとも、今回の助成を研究主題そのもの枠内で公にしたものとしては、これまでのところ次の2点である。は、助成期間中に刊行された。助成の対象となっている研究から直接、生まれたものではないが、主題の上では関連しており、併記する。

「さまよえる水晶宮」

『思想』（岩波書店、2020年6月号所収、「思想の言葉」）、2020年6月、pp. 2-5、<https://tanemaki.iwanami.co.jp/posts/3660>

「歴史の終わった後に」

『図書』（岩波書店、2022年6月号所収）、2022年6月、pp.13-17.

研究助成の枠内ではないが、関連する主題で公表したものとしては、次のものがある。

「思考の文体 存在を語る言葉を求めて」

『ハイデガー事典』（昭和堂、2022年6月号所収）、2022年6月、pp.13-17。（この事典では、ほかに「周困世界・環境世界」～のために、「スローターダイク」「手塚富雄」「プロッホマン」の項目の執筆を担当している。）

上記はいずれも短いもので、本格的な研究論文ではないが、それぞれの主題についてかなり明確な見通しを与えることができたと考えている。

の「さまよえる水晶宮」は、『球体圏』の第二巻の約5分の1を取り込んだうえで、およそ等

量の新たな書き足し部分を含む『資本の内部空間の中で』(2005年)の一節「水晶宮」の記述にモチーフを借りつつ、当時、蔓延し始めた新型コロナ肺炎を題材に、スローターダイクの球体圏のうち第二巻から第三巻にかけて近代から現代にいたる人間の居住空間の変容に関する議論の要約を試みたものである。ダイヤモンド・プリンセスが我が国で本格的にコロナの感染が拡大したのを機に、温室、船、航海、内部空間、培養器、免疫といった『球体圏』期のスローターダイクの一連のキーワードが一気にひとつの連関をもって浮上したことに申請者自身、驚かされたと同時に、あらためてスローターダイクの議論が説得力を持つことを痛感した。

の「歴史の終わったあとに」は、上記の「資本の内部空間の中で」が刊行された翌年にスローターダイクが発表した『憤慨と時間』(2006年)を取り上げたものである。これは、2000年代後半以降のスローターダイクが具体的な政治状況への発言が顕著になるきっかけとなった書物で、フランシス・フクヤマの『歴史の終わり』の中の気概(テュモス)の概念が検討され、リベラル・デモクラシーが現代世界で存続しうる可能性が主題となっている。これについて一文を纏めたものだが、その初校が出たあとロシアのウクライナ侵攻という事態が発生し、これに対応して原稿に相当、手を加えることになった。思いがけぬ形で主題が現代世界の問題に直結することを感じさせられた。

助成期間中は、主題的に関連するとはいえ、それに収まるわけではないフロイトに関連する仕事が続いたうえに、スローターダイク的内容的にも言語的にも極めて難解な著作の継続に追われ、なかなかそれを纏まった形にすることができなかった。しかし、彼の思想の日本での受容を推進することは、申請者の今後の変わらぬ課題であり、彼の数ある著作のうち、現在、『資本の内部空間の中で』の翻訳の作業を進めており、来年中に解説を付して刊行の予定である(元出版社との契約は完了。2023年5月の段階で約半分が翻訳済み)。当初、申請者は、スローターダイクに関する研究書を兼ねた概説書の執筆として検討しており、また出版社からもその趣旨で要請を受けていたが、今世紀に入って以後のスローターダイクの著作を読み進める中で、その全体像を視野に入れた概説書の執筆は、申請者にとって時期尚早と判断されたため、『球体圏』の思想を比較的コンパクトに収めた同書の翻訳を優先することを考えるに至った。

また、本年9月に、申請者がかつて勤務して現在、名誉教授として籍を持つ大学とは別の大学で、本研究課題とおおむね重なる主題で集中講義を予定している。

また、来年中には、上記の『資本の内部空間の中で』の翻訳とは別に、ドイツ思想史に関する自著を一冊上梓する予定であるが、このあと、できれば同じシリーズの中で、この集中講義を核に一冊、スローターダイクに関する概説書を刊行したいと考えている。ただし、これはあくまで申請者の希望であり、現時点で確定しているわけではない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高田 珠樹	4. 巻 6月号
2. 論文標題 歴史の終わったあとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 2, 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田珠樹	4. 巻 1154
2. 論文標題 思想の言葉 さまよえる水晶宮	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高田 珠樹、須藤 訓任、新宮 一成、道旗 泰三	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 476
3. 書名 総索引、年表、主要術語訳語対照表ほか	

1. 著者名 フロイト、高田 珠樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 606
3. 書名 日常生活の精神病理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------